

なかった。

総じて、報告では、聞き手が消化不良になるくらいの豊富な情報が提供されたが、そのことの裏返しとして、聞き手側には、個々の論点についてのつっこみ不足という欲求不満がたまることになる。限られた時間内での両立が困難なことは重々承知だが、今少しポイントを絞って深く追究してもよかったという印象は残った。

「おわりに」では、「地域社会の変容のモデル」が示された。しかし、ここでも曲田氏の地域社会理解が判然としない。「地域社会」とは報告で多用されたなかのどのレベルの地域を指すのか、「変容」とは何をメルクマールにした変容なのか。曲田氏の地域社会論の核心にあるのは醸造業ということでもいいのか、それとも醸造業は氏の地域社会論の1構成要素ということなのだろうか。また、提示された「変容モデル」が、「伊勢湾地域」に固有の話なのか、他地域にも一般化できるものなのかもわからなかった。「伊勢湾地域」の地域的特色・個性とは端的に言って何なのだろうか。

「変容モデル」の内容をみても、石高による階層構成には現れないかたちで階層分化が進んでいるとの指摘などはそのとおりではあるが、そのこと自体は村落史研究ですでに常識である。これは1例だが、全体として、曲田氏が示した「変容モデル」の研究史的画期性がどこにあるのか、明確に述べて報告を締めくくる必要があったろう。

最後に、大会全体について一言したい。運営委員会の問題提起によれば、両報告は「領主権力による支配・編成の枠組みを前提とすることなく、人々の生活レベルに視点を据えて総合的な議論を展開」したところに方法論的新しさがあるという。評者はこうした方法は間違っていないと思うが、新たな方法論の提起になっているかどうかは疑問である。両報告者には、先行研究に対する過不足ない目配りと批判的検討、そして先行研究に対置するかたちでの自説の研究史的意義の明示をしてほしかった。研究史との真摯な格闘と的を絞った的確な実証、そして以上をふまえた大胆かつ斬新な問題提起、評者が大会報告に期待するのはそれである。

〈近代史部会〉

田中ひかる アメリカ合衆国におけるロシア系移民
アナーキスト
梅森 直之 日本思想史におけるアナーキズムの位置

下里俊行／三原容子

国家と市場という二つの権力の操作を通じて社会をデザインしようとした大きな物語への信用が相次いで失墜したように見える今日、あらゆる権力掌握のビジョンを忌避しつつ新たな共同性をめざす思想・実践としてのアナーキズムへの関心が高まっているのは必然的な成り行きだろう。このことは党＝国家による社会改造を経験したロシアでも例外ではない。バクーニン、クロボトキンの祖国でアナーキストたちはアクティブな集団として20世紀初頭の革命過程の一翼を担ったものの、赤軍との武力対決に敗北して以降は政治的に消滅したかに見えた。だがソ連崩壊直後には、反共産主義・反リベラリズムを基調とした多様なアナーキスト集団が爆発的に蘇生する。1992年のクロボトキン生誕150周年会議以降、これまで30点以上の関連書（特に2008年に「偉人伝」叢書の一冊としてマフノの伝記）が刊行されたことは、現代ロシアでのアナーキズムへの関心の高まりを象徴している。この関心は、反中央の気風が根強いシベリア・極東の研究者たちによって支えられつつ、モスクワなど中央の研究者たちの間では、ポスト工業化時代における非国家・非市場型の協同経済の再評価など新たな共同性を模索するという理論的な志向と結びついている。

田中報告の特徴は、アナーキズムに関する従来の社会構造論的解釈に対抗して北米でのロシア系移民のライフ・ヒストリーに注目することで、その内面的自己形成における個別具体的な人間関係、すなわちユダヤ系ないしイディッシュ語という文化的要素で結ばれたトランスナショナルかつローカルな人的紐帯の重要性を指摘したものであった。田中報告の最大の成果は、萌芽的でありながらもアナーキズムについての従来の作られたステレオタイプに対して、実証的に異論を提示した点である。だが同報告でいう「ユダヤ系ロシア人移民」という範疇はさらなる

吟味が不可欠である。アナキストという独特の思想的アイデンティティの構築において、これらユダヤ系・ロシア人・移民といった要素がどのような役割を果たしていたのかを一方で「外側から」より大きな歴史過程に関係づけるとともに、他方で当事者たちがこれらの要素をどう意識していたのかという「内側から」の視点で分析を深める必要がある。定式化して言えば、①ロシア帝国から米国への移民を惹起させた世界経済システムの動態とユダヤ系ロシア人移民ネットワークの形成との関係、②この後者の社会文化的紐帯とアナキストという思想的アイデンティティとの関係、そして③アナキストというアイデンティティと世界史過程との関係（アナキストの歴史意識の歴史性）という三つの次元の関係性を解明することが今後の大きな課題となるであろう。

実はこれらの課題は梅森報告に直結する。梅森報告は、アナキズムの理論的核心を、富の分配・再分配ではなく「労働そのもの」のオルタナティブなあり方を希求するビジョンとして位置づけ、働く人々が資本の（継続的）原始的蓄積過程に直面した時に生じたある種の「構え」としてのアナキズムが形成されたという独自の解釈を打ち出した。アナキズムという歴史現象を、階級還元論とは別の次元で社会経済過程と関連づけて思想史のなかに再定義しようとした企図は高く評価したい。だがこの野心的企図の今後の課題は、アナキストの独自の「構え」の歴史的意義をどのように説得力あるかたちで展開することができるのかにある。大会当日には、反グローバリズム、ナショナリズム、エコロジー、フェミニズムといった隣接する思想・実践との関連について質問が集中した。このことは梅森報告の射程の広さを物語っている。特に注目すべきは八太舟三の「純正無政府主義」の理論的独創性を高く評価したジョン・クランプへの言及である。それは日本語によるアナキズムを「日本思想史」の枠組みを超えて世界史的視点から意味づけることの重要性を示しており、田中報告が提起した跨境するネットワークという論点とどう接合させていくのかという課題と不可分である。

アナキストの行動様式の特徴の一つは、ナシヨ

ナルな国家権力の掌握という戦略を自覚的に拒否しつつ、ミクロな権力関係の変容をめざし、ローカルに行動しながらグローバルに連帯するという生き方であると言える。そうであるならばアナキズム研究にとって重要なのは、田中報告が挑戦したような血縁・地縁・地域・職場などローカルな生活圏でのミクロな実践と、国境を越えた連帯の痕跡を示す新たな史料の発掘である。政府・議会・党・組合などの代行機関によって代理表象されることを意識的に拒否する人びとは、他者を表象し物語ることを生業とする歴史家にとって最も厄介な対象である。それにもかかわらず、歴史家たちがアナキストを本格的に研究組上にのせたことは新しい時代の徴候である。アナキストの声の世界史の無数の物語の一つとして語られる時、それらの声を抑圧してきた従来の権力的な語りにとって代わる、より多元的で共生的な歴史像の構築へと一歩前進することは疑いないだろう。（下里俊行）

限られた字数を承知の上で、まずは筆者の事情説明から始めたい。報告批判を引き受ける資格があったのかと、今に至ってもまだ逡巡する気持ちを抑えられないからである。

20年近く個人的事情でアナキズム運動史の研究から遠ざかっていた。近年発行されているアナキズム関係雑誌やウェブサイトにも縁遠い。もとより歴研の会員ではない。大杉栄以降のアナキズム運動史の経緯を新聞雑誌記事調査によって明らかにした1980年代の評者の著作物等が、例会・大会を準備する研究者の方々の目に留まっていたために、今回お誘いを受けることになったそうである。ソ連崩壊以前に四面楚歌的白眼視のなかでアナキズムを研究していた評者は、「なぜ歴研がアナキズムを取り上げるのか」と不審に思いながら、アナキズムの表舞台への登場が嬉しかった。しかし、議論の土台が昔の研究蓄積しかないというお粗末な安請け合いである。

暇を盗んで、なぜ今頃になってアナキズムが歴研で取り上げられるのかを知るべく、ベネディクト・アンダーソンとデヴィッド・グレーバーをかじってみた。かつて研究していた、地球規模的交友